

ミキ先生の死を悼みて

檜 林 滉 二

武田ミキ前学長が亡くなられた。平成五年十二月二十八日の早朝、新聞誌上で知ったとき、一種のショックを感じた。その夜の通夜、翌日の御葬儀、私には何か奇妙な落魄感があり、いかにも辛い年末であった。

一、大学人としてともに生きて

ミキ先生にかわりつつ思い起こせば、慙愧のことばかりである。私は、昭和四十三年から四十六年まで三年間、広島文教女子大学に在職した。若き頃、何も解っていない時期であった（今も、何も解っていないことでは大差はないのだが）短大部はすでに二期生を出していたが、大学部は開設三年目であった。山根安太郎先生が主任教授として、新しい国文学科の教室づくりを進められていた。ロマンチストであった先生の心から最も盛んであった時期でもある。そして、ミキ学長の中にも、生徒教職員一体となって学園を創ってこられた志と心とがそのまま脈々と流れていた時期でもあった。その二つの情熱が、時々ぶつかりあった。学長は学園創立の倫理的建学の精神から論じられ、山根先生は自由と解放を尊重された大学理念から論じられる。それらはどちらも全く功利や名利を離れたもので、それ故、いかにも美しく好ましいいぶつかり合いであった。

若気の私は、ブンガクしているつもりで、自由と独立とを誇りとしたいわば大正教養主義の世界に憧れていた。しかし、大正教養派には精神的自由への憧れと強い自律をとまなう倫理への憧れとがある。そしてそれが、山根先生、ミキ学長両者の中に如実に現れていた。私は両者の対立のさまがいかにも好ましかった。

具体的にはこうであった。草創期のこと、そして私のようないかげんな教師もいることとて、教室や学生の躰けはどうしてもルーズになった。いや、私の中にもそういうものをよしとするような思い違いがどこかにあった。とくに私の場合、放任し自律を待つという、言葉はいかにも格好よいが、実は単なる手抜ききの正当化でしかなかったことを平気で自己の理念としていた。私は別として、そういう自由の空気があった。ミキ学長はそういうところが、少し思いと異なり、時々、苦言を呈された、ミキ学長の本旨は、何より修身、克己にあった、それはそれでいかに美しくかった。山根先生はそれに対して、精神の自由を主張され、「ここは大学ですぞ」と反論された。思う

さえ懐かしい時代である。その中、この相剋、すなわち、精神の自立、自由の空気と厳しい克己と倫理への憧れとは、ないまぜになりながら、ゆっくり本学の学風の中に種をおろし、育っていった感がある。

よく、ミキ学長は、学園草創期の話をされた。現在は広島市民病院になっているが、そこに校舎をつくり、教職員、生徒も一体となってグラウンドの石ころ拾いから始まった、苦しいが理想に燃えていた時の話。そして、話の途次、よく涙された。私たちは、「泣きの学長」と言つて、それを聞くのを困惑しながら、しかし心の底のどこかで、一種の誇りにもしていた。一粒の麦、ここに蒔かれる、そういう思いであった。

真新しい黒板の上にはつてあつたビニール、それを学生とともにがしつ、授業を始めた、その心意気を山根先生はよく話されたものだ。二年年の人数、文学部国文学科十数名、短期大学部国文科三十数名の時代である。事実、黒板の隅に、まだビニールの切れはしが残り、わざとそれを残して、創学の心を話した。しかし、本当にビニールの切れはしがあつたかどうか、ふと思いをこらすと、私には定かでなくなる。ただ、私の眼底には、奇妙にはつきりそこだけが残っているのである。あとからつけた記憶の思い入れの残像かもしれない。横山邦治先生、山内洋一郎先生たちとの討議も、いかにも楽しいものだった。

しかし、その中で、私は何をしたのか、中野重治流に言えば、私は何もしなかった、まさに慙愧、慙愧の思いである。

あれから二十数年たつた。武田ミキ前学長が亡くなられたのを知った時、どこかで、また時代が一つ移つた、そういう強い思いにとらわれた。井伏鱒二の死、田中角栄元総理の死などとあわせ、何かがあつて、今、たしかにその何かが消えてゆくを感じた。

一、大学人としてともに生きて

存在するだけでさえ、それだけでも何かあった。多くはそれを梃子としたり、支えとしたり、目標としたりしながら、論議し、競い、闘いあった。あのはるか、二十数年前の日々を、私はいかにも懐かしく思い起こす。

武田ミキ前学長の御冥福をただただ祈るものである。